友だちのしょうこ

まゆとさち子は、新しく駅前でできた文ぼう具やさんにでかけました。そこには、今までに見たことのないすてきな商品が、たくさんならんでいました。

「ねえ、まゆみさん、見て。すごくかわいい筆箱。わたし、これ買うわ。ねえ、まゆみさんも、この筆箱をいっしょに買って、おそろいにしましょうよ。そうよ、友だちのしょうことして。ね、いいでしょう?」

「そうだね。そういうのって、すてきね。家に帰って、お母さんに話してみるわ。」

ふたりはお店を出て、家に帰りました。

「おばあちゃん、おねがいがあるの。筆箱を買ってほしいの。」

まゆみは、筆箱がほしくてたまらない気持ちを、一生けんめい話しました。

「かわいいまゆみちゃんが、そんなにほしいのなら、買ってあげるよ。」

「やったあ、おばあちゃんは、やっぱり話がわかる。ありがとう、大好き!」

するとそこへ、お母さんが、こわい顔をして入ってきました。まゆみが、大きな声 で話すものだから、台所にいたお母さんにも聞こえたのです。

「まゆみ、この前、新しい筆箱を買ったばかりじゃないの。よく考えなさい。」

「お母さんには関係ないでしょう。」

まゆみは、じぶんのへやのドアを、バタンとしめました。

（お母さんは、わたしの気持ちなんて、ちっともわかってくれないんだから。あの筆箱は、友だちのしょうこなんだから。）

そんなことを考えていたら、いつの間にか、ベットでねむってしまいました。しばらくして、お父さんがへやに入ってきて、しずかに話しだしました。

「お父さんも子どものころ、お前と同じようなことがあったんだよ。友だちが、新しい野球のグローブを買ってね。そうしたら、その友だちがすごくうまくて、かっこよく見えたんだ。それで、おばあちゃんに、『新しいグローブがほしい。』って、たのんだんだよ。でもね、おばあちゃんは、『持っているのが使えなくなったわけじゃないから、だめ。』っていうんだ。もう、くやしくて、今のまゆみのように、ふくれてねむってしまったんだよ。次の日、朝起きてみると、つくえの上にぴかぴかにみがかれたグローブがおいてあったんだ。きっと夜おそくまで、一生けんめいみがいてくれたんだろうね。それを見たら、新しいグローブなんていらないと思ったんだよ。」

お父さんはそれだけ話すと、へやを出ていきました。

（お父さんもわたしと同じことがあったんだ。あのやさしいおばあちゃんが、しんじられないな。ほんとうにあの筆箱が、ひつようなんだろうか?）

その次の朝、まゆみは、学校へ急ぎました。